



	主な事象
荒井寛方	栃木県の生まれ。本名は寛十郎。水野年方に師事して初め歴史画を学んだが、のち仏画を得意とした。初期文展に数々賞を受け、のち再興日本美術院に入り同人となった。大正5年にはアジャンターの壁画の模写と彼の地の美術学校に教鞭を執るためインドに渡る。その他、中央アジア、法隆寺金堂等の壁画模写に従事し、斯道の権威者であった。
あらいかんぼう	
1878-1945 明治11年 - 昭和20年	
伊東深水	本名は一、東京深川に生まれ、鍋木清方に師事し、版画「対鏡」を処女作とし現代風俗画家特に美人画家としてよく知られる。文展、日展に出品し、「指」「秋晴れ」「羽子の音」「鏡獅子」「鏡」等の名作があり、小品、創作版画にも敏腕を振るい、現代美人画家の第一人者。洗練された技法によって描き出される数々の美人画は一つの新しい形式を完成し、昭和33年秋渡欧することによって更に新しい境地を作り出した。芸術院会員。
いとうしんすい	
1898-1972 明治31年 - 昭和47年	
上村松園	本名は常子、京都に生まれ、鈴木松年、幸野楳嶺、竹内栖鳳に師事し、美人画を得意として温麗な画風を以って知られた。若くしてその画才を認められてから勉励よく常に新機軸ある作風を世に問い、閨秀作家の実力を示し、芸術院会員、皇室技芸員の栄位を得たのみならず女性として最初に文化勲章を授与された。
うえむらしょうえん	
1875-1949 明治8年 - 昭和24年	
宇田荻邨	本名は善次郎、三重県松坂に生まれ、菊池芳文、菊池契月に師事。昭和19年の第一回帝展に入選以来、連続入選し、「淀の水車」で帝国美術院賞を受賞。戦後は日展で活躍し、一貫して京の風物を描き、四条派の基礎に大和絵の古典的作風を加えつつ独特の画境を広げた。昭和36年日本芸術院会員となり、昭和42年勲三等瑞宝章を受章。
うだてきそん	
1896-1980 明治29年 - 昭和55年	
太田聴雨	宮城県に生まれ、上京して川端玉章門下の内籐晴州に学ぶ。のち前田青邨に師事して院展に出品、花鳥画・歴史画・肖像画と巾の広い作域をもち、古典的な清雅な作風で知られ、新しい時代意識を盛り込もうとした試みも見られ、伝統への愛着と現代的表現の中に制作の道を求めた。
おおたちょうう	
1896-1958 明治29年 - 昭和33年	
小川芋銭	東京に生まれ、名は茂吉。初め洋画を学び、のち朝野新聞にスケッチ漫画を掲載し芋銭と号した。大正6年日本美術院同人に推され、爾來毎回飄逸枯淡の異色ある作品を発表した。特に河童の名人として有名である。
おがわうせん	
1868-1938 明治元年 - 昭和13年	
奥村土牛	東京に生まれ、名は義三。梶田半古に師事し、小林古径は兄弟子である。軽妙な筆致と瀟洒な賦彩に特色があり、「鴨」「真鶴」「仔馬」等の作がある。日本美術院の同人であり、昭和22年芸術院会員に推挙され、37年文化勲章を授与された。
おくむらとぎゅう	
1889-1990 明治22年 - 平成2年	
小倉遊亀	滋賀県に生まれ、奈良女子高等師範学校を首席で卒業。高等女学校教諭として勤務のかたわら、絵の制作に励み安田靫彦に師事して院展に出品、繊細かつ的確な造形による明るい色彩の独創的な画境を展開、昭和51年日本芸術院会員、53年文化功労者、55年文化勲章を受章。閨秀画家として最高峰をきわめる。日本美術院理事長も勤めた。
おぐらゆき	
1895-2000 明治28年 - 平成12年	
梶田半古	東京下谷御徒町に生まれる。父は彫金家政晴で、本名錠次郎初め鍋田玉英に師事し、のち鈴木華邨に学び、さらに日本美術院に入って研究し、明治31年には富山県立工業学校の教頭となった。図案の才に富み、また新聞小説の挿絵を描いて名声を博したが門下に小林古径、前田青邨等の有能な画人を出したことで注目される。
かじたはんこ	
1870-1917 明治3年 - 大正6年	
堅山南風	熊本市に生まれ、高橋広湖の塾に入門し、大正2年第7回文展に「霜月頃」を出品して二等賞を受けたが、院展再興にあたって参加し、のち同人に推された。日本芸術院会員に挙げられ、財団法人日本美術院理事、文化功労者、昭和43年文化勲章を受章。
かたやまなんふう	
1887-1980 明治20年 - 昭和55年	

狩野芳崖	山口県に生まれ、松隣または勝海と号した。世々萩藩の画師であったが若くして江戸に上って狩野雅信の門に学び、橋本雅邦と共にその英才を謳われた。明治維新の社会的激変は非凡な画才も埋もれていたがフェノロサに認められ東京美術学校に聘せられて美術教育の革新に尽力したが開校に先立って世を去った。芳崖が残した諸力作は後進を激励する大きな炬火となって近代日本画の新しい領域を開いた。
かのうほうがい	
1828-1888	
文政11年 - 明治21年	
鍋木清方	東京生まれ、14歳の時から江戸浮世絵の系統をつぐ水野年方に師事、以来終始風俗画を描き続けて、卑俗化しつつあった風俗画の芸術性を高め、殊に江戸情趣や明治風俗を描いては余人の追隨し得ないものを示した。烏合会、金鈴社に参加、また官展でも活躍、日本画壇における長老であった。帝室技芸員、日展顧問、日本芸術院会員、昭和29年文化勲章受賞。
かぶらききよかた	
1878-1972	
明治11年 - 昭和47年	
川合玉堂	本名は芳三郎、愛知県に生まれ始め京都で幸野梅嶺、望月玉泉に丸山派を学び、上京して橋本雅邦に狩野派を教わり、次第に両様式を統合して自己の画風を作り上げたが、深く伝統的な画体を把握して明治、大正の新時代的な感情とをそれに盛って、東京画壇におけるアカデミックな一代表様式を作った。帝国美術院会員、東京美術学校教授を経て、帝室技芸員、芸術院会員となり文化勲章を受く。
かわいぎょくどう	
1878-1957	
明治6年 - 昭和32年	
川端龍子	名は昇太郎、和歌山市に生まれ、初め洋画を学び白馬会に出品。大正元年渡米し、帰朝後日本画に転じ、院展に「神戦絵巻」「土」「使徒所行讃」等を発表した。昭和3年院展脱退後、青竜社を創設、主宰し、会場藝術論を唱え、伝統的な技法や型を破る奇抜な内容と豪放な筆致によって常に画壇に問題を投じていた。「魚紋」「鳴戸」「新樹の曲」等の名作があり、また「太平洋」連作「大陸策」三部作「赤不動」等の大作がある。在野画壇の雄将として健筆をふるっていた。昭和36年文化勲章を授与された。
かわばたりゆうし	
1885-1966	
明治18年 - 昭和41年	
川村曼舟	
かわむらまんしゅう	山元春挙に師事し、山水画に巧みで、「細雨空濛」「犬山図」等があり、大正8年帝展審査員、京都絵画専門学校校長を勤めた。
1880-1942	
明治13年 - 昭和17年	
岸田劉生	東京に生まれ、白馬会研究所で洋画を学び、早く文展にも入選したが、大正元年フューザン会に参加、同五年には草土舎を創立した。白樺の人道主義に呼应しつつ印象派系のゆき方に抗して、デューラー風の写実に徹しようとし、その後ようやく東洋的な表現を加え、春陽会、大調和展や三条会に交じって主として主として宋元画の世界に遊んだ。
きしだりゆうせい	
1891-1929	
明治22年 - 昭和4年	
木村荘八	
きむらそうはち	東京生まれ、ヒューザン会、草土社など岸田劉生と共に大正期の画壇に活躍した。春陽会会員であり、挿絵画家としても特徴がある。
1893-1958	
明治26年 - 昭和33年	
小杉放庵	栃木県生まれ、洋画の五百城文哉などに師事し、未醒と号して文展に洋画を出品、大正元年に外遊、日本美術院洋画部に参加、のちに春陽会会員となり、芸術院会員に補された。晩年は麻紙による水墨淡彩風の日本画を描き、南画風の独特の作品は味わい深いものがある。
こすぎほうあん	
1881-1964	
明治14年 - 昭和39年	
小林柯白	
こばやしかはく	大阪に生まれ、明治45年上京して今村紫紅に就いて学び、紫紅没後安田靫彦に師事する。大正7年再興第五回院展に初入選以来連続入選を続け13年同人に推挙された。清楚な花鳥画に傑作が多く遺されている。
1895-1943	
明治28年 - 昭和18年	
小林古径	新潟県に生まれ、本名は茂。明治32年に上京して梶田半古に学び、日本美術院絵画共進会に出品し、大正3年美術院同人、同11年に渡欧、昭和12年に芸術院会員、19年に東京美術学校教授、帝室技芸員、25年に文化勲章を受け26年に教授を辞す。その間「竹取物語」「鶴と七面鳥」「清姫」「髪」などの名作を描き、古典を近代的な清潔な感覚で解釈して新様式を生み、画壇の長老となった。
こばやしこけい	
1883-1957	
明治16年 - 昭和32年	
近藤浩一路	山梨県生まれ、東京美術学校西洋画科を卒業。はじめ文展などに油絵を発表していたが大正8年再興第6回院展に日本画を出品初入選、のち同人に推挙され、以来水墨画に洋画風の光の描写を取り入れ独特の作品をほとんど連年院展に発表して注目されたが昭和10年脱退、のち日展に属した。水墨の濃淡による実感描写に特徴を發揮した。
こんどうこういちろ	
1884-1962	
明治17年 - 昭和37年	
酒井三良	
さかいさんりょう	福島県に生まれ、坂内青嵐に師事した。田園風物画に特色を示し、また水墨画に新風を吹き込んだ。昭和37年第47回院展に於いて雪国の子供たちを描いた「かまく

1897-1969	ら」は、文部大臣賞を受賞した。日本美術院同人。
明治30年 - 昭和44年	
島田墨仙	越前福井藩士の家に生まれ、はじめ画を父に学び、のち橋本雅邦の門に入り、日本絵画協会、前期日本美術院等に関係し、大正14年帝展第一部委員となり、昭和18年帝国藝術院賞を授与された。歴史肖像画に長じ名作を多く遺したが、「山鹿素行先生」「塙保己一像」は代表作。
しまだぼくせん	
1867-1943	
慶応3年 - 昭和18年	
下村観山	和歌山県に生まれ、狩野芳崖、橋本雅邦に学び、東京美術学校を第一回に卒業、しばらく学校に助教として残ったが、校長岡倉天心に殉じて去り、日本美術院の創立に参加し、大観、春草らと共に院展の精鋭として知られた。外遊後美術院の再興にも尽力したが、また母校に教授として戻り、帝室技芸員にもなった。作風は高雅で優れた色感を示した。
しもむらかんざん	
1873-1930	
明治6年 - 昭和5年	
鈴木信太郎	東京に生まれ、白馬会研究所に学び、また石井柏亭に師事。大正11年以降二科会に出品し、同会会員として重鎮であったが、昭和30年袂をわかって、一陽会を創立ふくらみのある温和な色調と独特の素朴さは純真なものを示して特色がある。随筆にも豊かな才能を示し「お祭りの太鼓」「阿蘭陀まんざい」等の著書がある。
すずきしんたろう	
1895-1989	
明治28年 - 平成元年	
関主税	千葉県に生まれ、東京美術学校卒業。結城素明、中村岳陵に師事、淡雅な色彩の独特の画面は山水画、花鳥画に高い品格を持ち、日展理事として健筆をふるった。日展内閣総理大臣賞。
せきちから	
1919-2000	
大正8年 - 平成12年	
竹内栖鳳	名は恒吉、初め棲鳳と号す。京都出身で幸野楳嶺に四条派を学び、その上に立って明治の新時代的表現を行って新画風を作り、「絵になる最初」「あれ夕立に」を出世作として「雨霽」によって確固とした地位を占めた。帝室技芸員、帝国美術院会員、京都市立美術学校教授となって、関西日本画壇の指導者となり、文化勲章を初めて受章した。
たけうちせいほう	
1864-1942	
元治元年 - 昭和17年	
竹久夢二	岡山県に生まれ、早稲田実業学校に入り、明治44年頃から挿絵や詩文を書いて、少女的な叙情豊かな表現を以って夢二的様式を作り大正末期から昭和初期にかけて一世を風靡した。
たけひさゆめじ	
1884-1934	
明治17年 - 昭和9年	
田中以知庵	東京に生まれ、松本楓湖に師事して紅児会に入り、その後諸種の展覧会に出品して日展委員となる。別号咄哉州といい花鳥画に雅味豊かな作品が多い。
たなかいちあん	
1893-1958	
明治26年 - 昭和33年	
土田麦僊	名は金一、佐渡平穩村に生まれる。鈴木松年、竹内栖鳳の門に入り、「罰」を出品し新進作家として名を成した。以後国画創作協会に「海女」「春離趁晴」等の問題作を出し、渡欧後東西絵画に対する大胆な追及が試みられ、「湯女」「舞妓林泉」「大原女」「嬰粟」等の力作を示したが、これは新しい日本画開拓の先駆をなすものであった。帝国美術院会員(昭和9年)となった。
つちだぼくせん	
1887-1936	
明治20年 - 昭和11年	
寺島紫明	兵庫県に生まれ、鍋木清方に師事。昭和元年第7回帝展に初入選。昭和15年清方の門下生を集めて清流会を組織。昭和16年第4回文展で特選を得る。昭和17年第5回文展でも特選となり、昭和18年無鑑査、昭和26年第7回日展で審査員、代表作は「秋単衣」「初冬」「彼岸」等がある。昭和45年日本芸術院恩賜賞をうく。
てらしましめい	
1896-1975	
明治29年 - 昭和50年	
堂本印象	本名は三之助、京都の生まれ。京都絵画専門学校を卒業し、西山翠嶂の青甲社の社中、官展を舞台に力作を発表したが、また四天王寺や高野大塔、浅草寺などの壁画の大作にも従事し、晩年は洋画的新画風による問題作を描いた。帝室技芸院、芸術院会員、昭和36年文化勲章を授与された。
どうもといんしょう	
1891-1975	
明治24年 - 昭和50年	
富岡鉄斎	京都の人、名は猷輔、後に百鍊。号は鉄斎・鉄人・鉄史など。儒学、詩文、仏典を修め、のち大和絵から南画に進んだ。幕末志土と交わり歌人蓮月尼の庇護を受けたのは名高い。維新以後、石上神社、大鳥神社の宮司となったこともあるが、常に彩管を執り、高逸なる画風は文人画の本領をよく発揮した。帝室技芸員、帝国美術院会員も勤めた。
とみおかてっさい	
1836-1924	
天保7年 - 大正13年	
富田溪仙	福岡市の生まれ、京都に出て、都路華香の門に入って四条派を学び、のち仙崖禅師

とみたけいせん	に傾倒し、奈良、平安朝の仏画を研究し、富岡鉄斎を訪れ、南画の垂示を受け、南画風の異色ある大作を残す。始め文展に出品、のち院展に転じ美術院同人となる。昭和10年帝国美術院会員に挙げられた。
1879-1936	
明治12年 - 昭和11年	
西村五雲	京都に生まれ、岸竹堂、竹内栖鳳に師事して、花鳥、魚貝、獸類をよく描いた。竹堂・栖鳳の画風を摂取し、栖鳳の後継者であった。「白熊」「日照雨」「咆哮」「冬暖」等の作があり、京都絵画専門学校教授、帝国芸術院会員であった。
にしむらごうん	
1877-1938	
明治10年 - 昭和13年	京都に生まれ、竹内栖鳳に師事し、京都絵画専門学校在学中頭角をあらわし栖鳳門下の俊才といわれた。師の画風をよく継承し、人物風景に秀で、栖鳳なきあとは京都のみならず、日本画壇の長老として重きをなし、戦後もたゆまず制作を続けた。その画題は老境の枯淡な画境が現れている。また青甲社を主宰して後進の育成につとめ幾多の優秀な作家を輩出し、25年に文化勲章を受けた。
西山翠嶂	
にしやますいしょう	
1879-1958	江戸に生まれ、狩野雅信 [〃] に学んで勝園雅邦と号した。幕末社会の不安と狩野家の没落と家庭的な困難とで辛酸をなめ、しかもその間をよく堪え、50歳ごろになって画名があらわれた。明治美術の指導者フェノロサ、岡倉天心と協力し、美術学校の主幹となり、のち日本美術院を創立して多くの俊秀を出した。狩野芳崖と共に近代日本画の育ての親といわれる。
橋本雅邦	
はしもとがほう	
1835-1908	神戸市に生まれ、初め竹内栖鳳に師事し、のち中国日本の古名画を研究し独自の画境を開拓して栖鳳に拮抗した。大正10年ヨーロッパに遊び、昭和9年帝室技芸員となり、翌年帝国美術院会員に推された。
橋本関雪	
はしもとかんせつ	
1883-1944	名は栄一、旧姓は蔭田、東京出身で松本楓湖に学び、今村紫紅、安田靉彦等の紅児会に入り、さらに赤燿会を結成して新日本画運動を起こし、日本美術院同人となる。初期は宗達派の象徴的な画風から写実主義に徹した緻密な画風に転じ、さらに新たな画境の進展は昭和5年欧州遊学による収穫であった。洋風画に東洋的な感覚を盛り上げ独自の画境となり、日本画を近代的に解釈して一形式を創造した先駆者であるが、若くして世を去ったのは惜しまれる。
速水御舟	
はやみぎょしゅう	
1894-1935	名は三男治、長野県出身で東京美術学校第一回の卒業。その卒業制作「寡婦と孤児」は橋本雅邦に推賞されてその天才振りを発揮した。その後岡倉天心を盟主に横山大観などと日本美術院を結成し、日本画に深い内容を表す新様式を創造した先駆者。晩年には「落葉」「黒猫」など美術史上不朽の名作を残し、洋画から学んだ写実的表現と日本画の伝統的装飾主義とを融合させることに成功した。生涯を貧と闘い続けて38歳の若さで早世したが、日本画壇への影響は少なくない。
菱田春草	
ひしだしゅんそう	
1874-1911	秋田県角館に日本画家平福穂庵の四男に生まれ、川端玉章の門に入り、次いで東京美術学校に学んだ。卒業後、結城素明らと金鈴社を結成し新日本画の運動を興し、また文展、帝展に毎回出品して異色ある作を発表した。晩年は枯淡な南宗味豊かな画を描き帝国美術院会員となった。またアララギ派の歌人としても知られている。
平福百穂	
ひらふくひやくすい	
1877-1933	広島に生まれ、東京美術学校を卒業。前田青邨に師事。中学生のとき、勤労動員で作業中、原子爆弾に被爆した後遺症と戦いながら自らの救いを求めて仏伝連作に精進し、更にシルクロードへの壮大なロマンに挑んで数々の傑作を描いている。日本美術院理事長、平成10年文化勲章受賞。東京藝術大学学長
平山郁夫	
ひらやまいくお	
1930- 2009	岐阜県に生まれ、梶田半古に師事して初期院展、紅児会、文展で活躍、大正3年再興院展同人に推挙され、安田靉彦と共に日本美術院同人中の元老の地位を占めた。歴史画、花鳥を得意として「洞窟の頼朝」や「阿修羅」等の代表作がある。帝室技芸員、日本芸術院会員、日本美術院理事長。昭和30年文化勲章受賞。
昭和5年 - 平成21年	
前田青邨	
まえだせいそん	山口県萩町の伊藤家に生まれ、のち松林家を嗣いだ。野口幽谷に師事し、初め日本美術協会に出品、つづいて文展に出品して??受賞した。日本南宗画会、日本美術協会の幹部として尽力し、帝展審査員、帝国美術院会員、帝国芸術院会員、帝室技芸員を歴任し、美術界に尽くした功績によって文化勲章を授与された。近代における南宗画界の代表作家で、南宗画の振興に尽くした功績は大きい。
1885-1977	
明治18年 - 昭和52年	
松林桂月	東京の貴族の家に生まれ、東京帝国大学社会科を中退。青年時代にトルストイに心酔、勤労しない食客的生活を否定、平和主義を唱えた。初期の小説には個人の中に人類の意思の実在を信ずる思想を天衣無縫の口語体で表現し、中期は作風も円熟して思想小説が多く、晩年は底抜けの楽天性を描いたものが多い。画筆にも親しんで
まつばやしけいげつ	
1875-1963	
明治8年 - 昭和38年	東京の貴族の家に生まれ、東京帝国大学社会科を中退。青年時代にトルストイに心酔、勤労しない食客的生活を否定、平和主義を唱えた。初期の小説には個人の中に人類の意思の実在を信ずる思想を天衣無縫の口語体で表現し、中期は作風も円熟して思想小説が多く、晩年は底抜けの楽天性を描いたものが多い。画筆にも親しんで
武者小路実篤	
むしゃのこうじさねあつ	
1885-1976	

明治18年 - 昭和50年	その画は香り高い。昭和26年文化勲章受賞、芸術院会員。
村上華岳	
むらかみかがく	大阪に生まれ、京都絵画専門学校を卒業。麦僊・紫峰・竹喬らと国画創作協会を創立、宗教的な香り高い作を残したが、晩年はもっぱら南画的境地に没入し、内面的追求を続け、自然観照の新技の開拓に努めた。
1888-1939	
明治21年 - 昭和14年	
安田鞞彦	本名新三郎。東京に生まれる。小堀鞞音に師事し、今村紫紅等と紅児会を起こして新日本画の開拓に尽くし、また日本美術院が再興されるや、その同人として尽瘁した。寡作であるが「守屋大連」「夢殿」は初期の代表作、「黄瀬川の陣」は日本画の長所を發揮した記念作である。高雅な洗練された画風に特色があり、古代美術に対する造詣を反映した「日食」や「王昭君」等にも独自の画風を示している。また画業の他、良寛和尚の筆蹟を世に顕揚した功績もある。帝室技芸員、芸術院会員で文化勲章を授与され、昭和26年まで東京藝術大学の教授であった。日本美術院理事長も勤めた。
やすだゆきひこ	
1884-1978	
明治17年 - 昭和53年	
山口蓬春	名は三郎、北海道に生まれ、松岡映丘に師事し、大和絵の画風を会得したのみならず、各派の画風をも摂取した。「三熊野的那智の御山」「緑庭」「市場」等の代表作があり、晩年は西欧画風、描法などを追究して、美しい色彩と技巧の妙に持味を示した。芸術院会員に推挙せられ、昭和40年文化勲章を受章。
やまぐちほうしゅん	
1893-1971	
明治26年 - 昭和46年	
山本春拳	滋賀県に生まれ、野村文挙、森寛齋に師事して円山派の伝統に基づいた風景画を得意とし文展で活躍した。竹内栖鳳と並んで明治・大正期京都画壇の中心的存在であった。帝室技芸員、京都絵画専門学校教授、帝国美術院会員。
やまもとしゅんきょ	
1871-1933	
明治4年 - 昭和8年	
横山大観	名は秀麿、水戸に生まれ明治26年に第一回の東京美術学校の卒業生で、橋本雅邦などに学び岡倉天心の指導を受けて同校助教授となったが、天心の校長辞任とともに辞して行動を共にし、日本美術院の結成に加わり、爾来終始して在野的精神と態度を堅持し手北。その画風は精神主義と文人墨客の気風とを重視する独自の画風を示し、「生生流転」以下の傑作を描き、美術院の主宰者としてまた画壇の最元老として重きをなしていた。帝室技芸員を勤め文化勲章初の受賞者であった。
よこやまたいかん	
1867-1958	
明治元年 - 昭和33年	

[トップへ](#)[大塚巧藝社の巧藝画へ](#)